

氏名	にし ゆきこ 西 幸子		
学位の種類	博士（文学）		
報告番号	甲第 1693 号		
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 15 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）		
学位論文題目	日韓馬具生産体制の検討		
論文審査委員	（主査）	福岡大学	教授 桃崎 祐輔
	（副査）	福岡大学	教授 武末 純一
		福岡大学	教授 森 茂暁
		九州大学	准教授 辻田 淳一郎

内容の要旨

本研究の目的は、日本列島古墳時代、韓半島三国時代における馬具生産体制の解明である。古墳時代馬具研究は、考古学の分野の中でも比較的検討が進んでいる分野であるにも関わらず、馬具の生産体制については未だ明確に解明されたとは言い難い。それは、古墳時代馬具のほとんどが、古墳出土品であり、さらに製作遺跡が未確認という資料的制約のため、生産段階に迫った検討が出来ていないことが、1つの大きな要因である。

現状でも馬具製作工房は未検出なので、検討資料に恵まれていないことに変わりはないが、地域ごとに出土した馬具と地域の鍛冶技術水準を統合し、両者を複合的に検討すれば、資料的制約を超えて、新たな方法で生産段階からの馬具生産研究ができると考え、方法論を確立し、検討を行った。つまり、筆者の研究方法でも実証的に馬具生産体制を解明することは難しい、しかし、蓋然性の優劣から、現状では最も実態に迫った馬具生産体制の解明が可能であると考え。

よって、各小地域ごとの馬具と鍛冶関連遺跡を対象に、具体的には、

- ① 対象地域で出土する鍛冶関連遺物・遺構を時代ごとに集成・検討し、素材・鍛冶具・鍛冶技術を整理して、鍛冶技術水準の推移を明らかにし、段階を設ける。
- ② 段階ごとに鍛冶技術水準の様相の変化と対象地域内で出土する馬具を対比し、各馬具がその段階に製作可能か不可能か検討する。
- ③ 地域の鍛冶集団がどの段階から自前の馬具生産を可能としえたか明らかにする。

という手順で検討を行った。今回対象とした地域は、韓半島＝蔚山地域、大邱・慶山地域、日本列島＝福岡平野、豊前北部地域、日向中部地域である。

結果、新羅地域では実用的な馬具の地域生産をしている。さらに、一定の階層性・規則

性を持つ威信財馬具であっても、特定地方下では地方生産されており、従来の一元生産・配布論には修正の余地があることが想定され、王宮付属工房、地方大規模生産集落、地方生産集落、村方鍛冶のおよそ4種類の馬具製作工房に分類されることを示した。そして、4つの馬具製作工房は組織的に、しかも有機的な構造を形成する。その構造の中で、各工房がその時々で目的とする馬具を製作することで、新羅地域の实用馬具・威信財馬具が生産され、それぞれに意味を持って新羅地域内で使用されたであろうことが想定され、また、この組織的な生産体制が王権や有力首長の社会的地位を示す役割を担ったことを想定した。

一方日本列島は、各地域では実用的な馬具の地域生産をしている。規格品馬具・表象馬具についても、特定の地方下では見本品の配布による地方生産が窺え、また、豪族居館に付属する工房では、銅素材を入手し、鑄銅製馬具生産もしていた可能性がある。さらに、種々の条件をクリアできた工房では、一部装飾馬具の地方生産も担ったことが予想された。しかし、実際の考古資料からは金・銀素材や透彫技法を用いるような装飾馬具生産の様相は、地域では窺えない。同地域内で木製馬具・皮革製馬具も複合的に生産したとみられ、地域内で一セットの馬具をすることも可能である。馬具製作工房には、王宮付属工房、居館付属工房、地方生産集落、村方鍛冶の4つが想定され、さらに、予察される馬具生産体制からは、列島内の馬具生産は地域生産、地方生産、中央生産の3つの生産レベルから成立することを想定した。

従来、日本列島馬具生産体制は、中央一元生産・配布論で説明されてきたが、これら3つの生産レベルが重層的に、有機的に絡まりながら構築され、その中で日本列島内の様々な馬具が生産されるとともに、一方ではこの組織的な生産体制が王権や有力首長の社会的地位を示す役割も担ったと考えた。

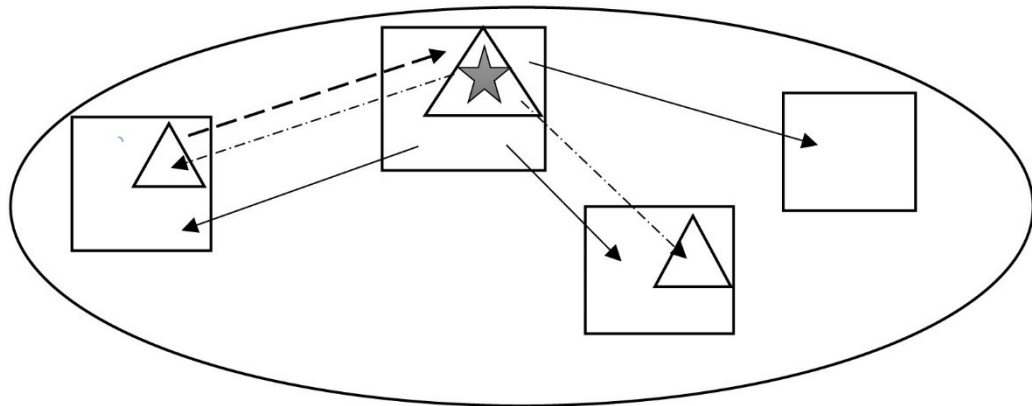
今回の検討では限られた地域の検討しができなかったため、日韓の馬具生産体制について十分に比較検討することはできなかった。しかし、新羅地域と日本列島の馬具生産体制が類似した様相を呈することからは、騎馬文化の導入に際して、ウマや馬具といった事物の渡来だけではなく、馬匹生産体制や馬具生産体制、馬具を威信財とする階層構造といった騎馬文化を取り巻く社会体制・構造をも導入したことが窺える。その場合、初期馬具同様、特定地域のものだけを導入・模範としたのではなく、中央政権が理想とする社会体制に適するよう、取捨選択と再編成が行われたと予想される。この点が解明されれば、なぜ、日本列島ではこのような馬具生産体制を採用した背景や騎馬文化に期待した効果、差r内は中央・地方の政治的連帯の在り方について新たな見解を示すことができるだろう。この点については今後の課題とする。

□：地方生産集落

- 実用馬具
- 規格品実用馬具
- 表象馬具

☆：王宮付属工房

- 規格品実用馬具
- 表象馬具
- 鑄銅製馬具
- 装飾馬具
- 超絶特殊装飾馬具



○：村方鍛冶

- 実用馬具

△：地方居館付属工房

- 実用馬具
- 規格品実用馬具
- 表象馬具
- 鑄銅製馬具(?)
- 装飾馬具

※→・→は製作技法の指導・工人移動または見本品配布を示す。

※→は地方から中央への工人の移動または意匠の伝播を示す。

日本列島馬具生産体制模式図

審査の結果の要旨

本研究は、日韓の馬具製作背景となる鍛冶技術の研究である。西幸子は大学在学中、馬術部主将をつとめ、馬具は高価でかつ使用によって損耗が避けられないため、日常的な修理や、破損馬具の残存部を組み合わせた再利用を経験したことが、馬具のライフストーリー論への視座を開き、人間活動に密着した分析を方向付けた。従来、古墳時代馬具生産は、古墳副葬馬具の各属性から地方生産を論じてきたが、これらは消費地での使用機能終了形態であり、製作や生産地の様相を直接は反映せず、馬具生産研究の最適な研究対象資料とは言い難いと断じ、馬具製作工房や生産遺跡出土馬具など生産段階資料を分析すべきとした。しかし現在まで明確な馬具製作工房跡は未検出で資料に恵まれないため、小地域内で出土する鉄製馬具と鉄・鉄器生産関連遺跡、鍛冶具を照合・対比することで、生産段階的

視点に基づく馬具生産研究は可能で、蓋然性の優劣で各地域の馬具生産の有無、様相を提示できるとの戦略を示した。

研究史は、馬具生産研究史の叙述は十分だが、本論が弥生・古墳時代鍛冶技術の総論的な指向を持つ以上、諸画期の設定にかかる議論の推移と、馬具生産論がどう関わってきたかを示す方がわかりやすい。近藤義郎・都出比呂志氏らマルキシズムに基づく内的発展・矛盾への着目、花田勝広・亀田修一氏ら外的影響・渡来系文化への着目、金武重氏のような韓国での鍛冶技術研究、また潮見浩・村上恭通氏ら生産遺跡と消費遺跡双方を視野におさめる鍛冶技術の復元的・分析的研究の学史も掘り下げる必要がある。

対象地域は、韓国の大邱慶山・蔚山、九州では福岡平野・豊前北部・日向中部、合計5地域で、いずれも馬具生産の可能性を検討できる。王権中枢ではなく、地方生産・地域生産を相対的に把握し、比較検討をめざす。馬具が出現する古墳時代前期後半以降に主眼を置きつつも、それに先立つ鍛冶技術水準の変化過程を、鉄器導入期にあたる弥生時代前期末以降から辿る手法は画期的である。作業工程は、

- ① 対象地域の鍛冶関連遺物（素材・鍛冶具）・遺構を時代異に集成・検討し、鍛冶技術水準の推移を明らかにし、段階を設ける。
- ② 地域内の鍛冶技術水準の変化と、地域内の各馬具を対比し、当該期に製作可能か否か検討する。
- ③ 地域の鍛冶集団がどの段階から自前の馬具生産を可能とし得たかを明らかにする。

対象遺物・遺構は、古墳・集落出土の鍛冶関連遺物（鍛冶具・鉄滓・鞆羽口・炉壁等）、鍛冶関連遺構（鍛冶炉・製鉄炉など）、馬具（特に、鍛冶具共伴馬具・補修馬具・集落出土馬具）とする。

対象地域のうち大邱・慶山は新羅に服属した地域集団であり、内的発展と外的影響を、南東隅沿岸の蔚山は鉄素材生産と外的影響、九州3か所は福岡平野・豊前北部が外的影響下での内的発展過程を、日向が間接的な外的影響を契機としつつも内的発展過程を示すと評価できる。

近年、古代の日韓交流は、伽耶（釜山・金海）や百済・慕韓（羅州・光州）ルートの議論が多い。一方、朴天秀、田中史生氏らは沖ノ島祭祀遺跡の新羅系文物に注目し交流を強調するが、地域間交流の事例研究が少ない。本論文で結果的に蔚山と東九州の通行が示唆された点も重要である。

本研究が、日韓の5地域をいずれも同じ手法・同じ精度で、通時的かつ詳細分析した上で対比したのは、おそらく初の試みで、オリジナリティが高い。

蔚山の達川鉦山は、重要な鉄鉦石供給鉦山で、達川遺跡では鉄鉦石採掘壙と三角形粘土帯土器・須玖Ⅱ式弥生土器が出土しているが、馬具生産が可能となるのは3世紀初頭以降で、4世紀後半には鉄棒を振じった鑣轡・鉄鋌を素材とした鏡板付轡が加わり、馬具の変遷と素材環境の変遷の連動を指摘した。

大邱・慶山では、馬具は2段階に出現するが鉗子がなく振銜が製作できない。馬具製作可能となるのは4世紀後半以降で、時至遺跡では装飾馬具生産の可能性もある。

福岡平野では、5世紀後半の那珂川町カクチガ浦古墳群で、鍛冶具と鑣轡の製作開始が想定されるが、飾馬具の在地生産は不可能とする。6世紀には九州各地で鉄製素環轡や木製馬具の生産も想定される。

以上、各地の鍛冶の在り方は、村方、地方、地方大規模、中央の4カテゴリからなり、中央による一元的・配布的な生産体制ではなく、各地域内でも鉄製馬具を生産した可能性が高いことを解明した。規格品馬具・装飾馬具は王宮付属工房での中央生産が想定された。よって日韓古墳時代馬具生産体制は、地域・地方・中央の3つのレベルが重層的・有機的に複合して構成され、生産体制が王権や中央首長の社会的地位を示す役割をも担ったと結論付け、従来モデルを克服した点は、博士論文として十分な到達点である。

なお中央生産の解明には、金銀銅素材を用い高度な彫金技法を駆使した装飾馬具の生産が予測される新羅慶州や畿内王権の中枢部の検討が不可欠で、今後の研究進展が待望される。